

みらいゼミ新聞

10月号
2023.10.11

立命館大学新聞社
西澤あかり
竹内凜
小林秀太

おじいちゃんの話

祖父に、幼いころから戦時中の話をよく聞かされてきた。大伯父（祖父の兄）は満州で戦死しており、家には手紙など多くの資料が残っている。このゼミを通して戦争経験者の記憶を残したい。そこから、私たちがどう過去を学び、継承していくのかを考えていく。

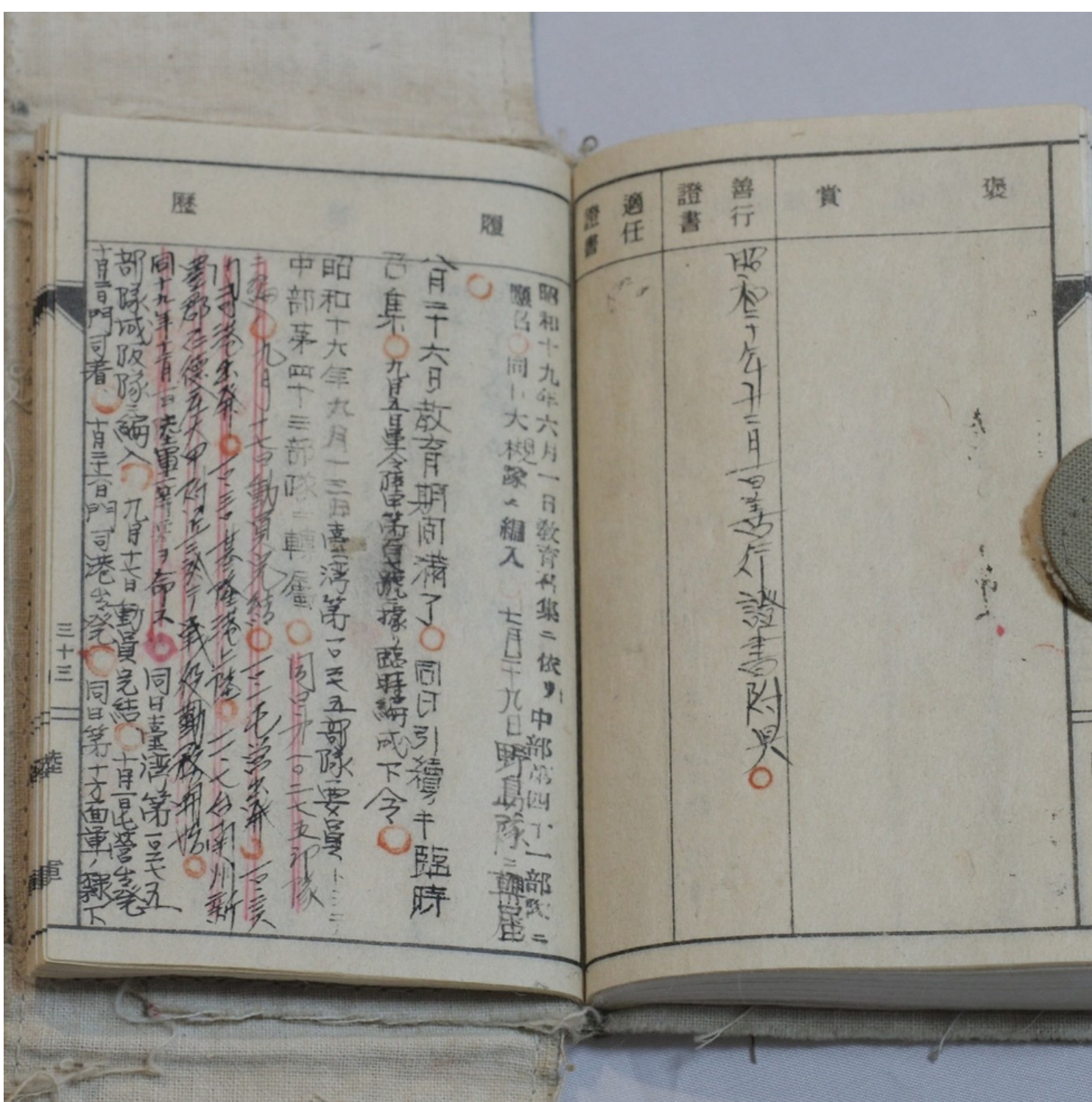
友人探すも収穫なし

帰省した際に、残っている資料の収集や祖父への取材を行った。満州の大伯父から家族に向けた手紙は何枚も集めることができた。そこには、両親の健康を心配する言葉が多くつづられていた。ハタチ前後での出兵だ。我々のように大学に行くわけではない。寂しくつらかったに違いない。



また、大叔父と満州で同じ連隊で過ごした三重出身の友人からの手紙を見つけた。ご家族を探したく、三重市役所や遺族会などを回ったが、満足のいく収穫はなかった。一か八か、ネット電話帳にあった自宅まで行ってみた。さすがに怪しかったか、断られたが近所の方の話によると、本人のご家族だと確信できた。

（次号に続く）



行軍綴った軍隊手帳

アジア太平洋戦争を陸軍軍人として過ごした曾祖父が2022年、亡くなった。曾祖父は戦争の経験を話したがらず、家族も戦時中の曾祖父のことをほとんど知らない。このことから、曾祖父の経験を知るために戦争に関する資料を探した。そのなかで戦時中の行動を記した軍隊手帳を発見した。これを契機に、さらに詳しく曾祖父の戦時中の足取りを追うべく京都府に連絡を取り、兵籍簿を入手した。これらを活用し作戦行動の詳細な調査を試みたが、各資料の解説・整理に困難を極め、達成できなかった。今後、資料を活用し調査を続けたい。

私たちはどうすべきか

子供ながらに終戦を知る

祖父が一枚の新聞記事を見せてくれた。そこに映っていたのは、当時10歳のまだ幼い祖父の姿。私の知らない子供時代の祖父は、軍人になるための教育を受け、戦争ごっこをして遊んでいたという。校庭で玉音放送を聞いたときは、意味は理解できなかったものの、後に「電気を黒い布で覆う生活をしなくていい」とわかりうれしさを感じたという。そんな話をしてくれた祖父は今、体を壊し入院している。限られた記憶を、どう受け継いでいくべきだろうか。



取材後記

メンバーそれぞれが身近な人や出来事を通し、テーマを決めて活動を進めている。戦争経験者がますます減っていくなか、どのように記憶を紡いでいくのか、まずは私たち自身で考えていきたい。